特250
961

現實生活と信仰生活

中央教化團體
聯合會理事　加藤咄堂先生述

大乘會發行

始

250
961

現實生活と信仰生活

昭和十二年六月廿三日 檢閱濟

現實生活と信仰生活

加藤咄堂先生述

佛と花

この四月は、お釋迦様がお生れになり、いろ〳〵な高僧方がお生れになりました月であります。また、聖德太子から申しますと、丁度、聖德太子のお祭が四月十一日に當つて居るのであります。舊暦では二月二十二日にお薨れになつたのでございますが、新暦になほして四月十一日と云ふので、大和の法隆寺に於きましても、東京に於きましても、そのお祭が行はれるのであります。

この四月と云ふのは、丁度櫻の花の咲く月でありまして、宗教界の聖方(ひじり)は心の花を咲かされたお方であります。それはお釋迦様の一代と云ふものをズツと見ますと、初めから終ひまで花であるのが氣付かれるのであります。御承知

の通りお釈迦様のお生れになりましたのは、四月八日で、藍毗尼園と云ふ花園で、御母摩耶夫人が花を摘み給ふ時にお生れになりました。お釈迦様のお生れになつた日を、花祭としてお祝ひ致しますが、花園でお生れになつたからでありませう。それから、太子様としてのお育ちと云ふものは、如何にも花やかなる御生活であつたと云ふことは、お釈迦様の御傳記を御覽のお方は御存じのことと思ひます。身は國王の子と生れ、さうして、その子は出家の相があると言はれたので、この世の中を厭やがらせまいと思ふて、春夏秋に亘ります三時の宮殿と云ふものを造られまして、そこにはすべての花を植え付けたり、夏は涼しく春は花咲きまする宮居の中に、花の如き宮女に侍かれて居られ、そして、御妃は五天竺の美人であると言はれたる耶輸陀羅姫を迎へられました。物質上の慾望、感覺上の慾望と云ふものが人間の望みであるならば、お釈迦様の半世、即ち悉達太子であらせられた間と云ふものは、もう事足りて、これ以上のものはない、かう申しても差支へはないのであります。

ところが、歡樂極まつて哀傷多しと申します。太子は靜かに考へられた。この感覺的な慾望は、いま自分を充足して居る、だが、この慾望を受けて居るこの肉體は、いつ迄保たれるのであるか。咲く花は散る、滿てる月は虧ける、今は陽春花の如く樂しんで居る、けれども、この歡樂はいつかは消え、わが獲た物はいつかはなくなる時がある。殊にこの人生には、病氣と云ひ、年寄ると云ふ、死ぬると云ふ苦しみがいつでもつき纏ふてゐる、何とかしてこんなみじめさからこの苦から脱れることは出來ないものか、と、そこに深い思索をめぐらして、迦毗羅の城と云ふ世俗的の城を脱出し、山へ入つて專ら精神の安定を得んとして努めなさつたのであります。

さうして、難行苦行をせられましたが、初めは世俗的の慾望のあつたのを去つて、今度は精神的の慾望を求められ

たのであります。けれども、身と心とは決して二つではないが、始め、お釈迦様が山へ這入つて修行せられたのは、この身を苦しめることによつて、心の樂しみを得らるゝと、云ふ難行苦行をせられたのです。そして、遂には餓死せんとする迄の御修行をなさつた。けれども、一體、人間の體と云ふものは、「俺」と云ふものは、心と身と離れるものではない。それだのに體を苦しめることによつて、心の安定を求めると云ふことは、丁度、秤の片方が上つて片方が下るやうなものだ、身を苦しめて精神の樂しみを得ようと云ふのは本當でない、身と心とは必ずしも別なものでないと云ふ、物心一如と云ふ所に心を定められて、佛陀伽耶の畔に於て、更に新たなる御修行を積まれ、さうして、曉天に蓮の花が咲くやうに悟の花を開かれましたのが、十二月八日である。これを心華開發と云ふ。さうして、一番最初にお說きなされましたお經は、今迄迷ふて居つた眼を捨てゝ、悟の眼を開いてみると、面白や散るもみぢ葉も咲く花も、自からなる法のみすがたで、天地萬物悉く花やかなものであると云ふ、この道理を喩へて說かれたのを『華嚴經』と申しまして、これが一番初めにお說きになつたお經であります。

それから、いろ〳〵のお經をお說きになりましたが、一番終ひにお說きなさつたのは何であるかと云ふと、法の花――『法華經』であります。法の花咲く法華の時と云ふ。御一代のお經、花に始まつて花に終つて居る。その間のお經は皆、心華を開かすが爲の敎である。また、その理想とせられた淨土は、蓮華咲くところの淨土、蓮の臺である。またさとりを開いた人は人中の分陀利華と申し、人の中での白蓮華であると云はれるので、斯の如くお釈迦様の御一代は、花に始まつて居り、さうして、その御終りはと云ふと、お滅れになつたのは沙羅双樹の花の下でお滅れになりましたから、花に終つて居らるるのであります。

で、お釋迦様の御一代は、花のやうなものであるが、最初は物質上の花、次は精神的の花を求めて得られなかつたが、悟を開かれてからのお釋迦様は、眞の花を開かせその實を結ばれたのである。お釋迦様と云へば三千年の古のお方で、吾々とはたいへん縁が遠いやうにも考へられますが、それは現實の我々の上にも明らかに味はへる。これを現實の吾々の生活の上から眺めてみますと、吾々の生活の大部分は何であるかと云ふと、お釋迦様が出家以前に求められた、物質上の慾望に駈られて居るのが、吾々の現實のすがたであります。それから、出家せられてから求められたのが精神生活である。我々にはこの一面もある。人間は物質生活と、精神生活とあつて、お釋迦様はこの精神生活と物質生活とは二つのものではない、物心一如であると云ふ悟を開かれて五十年の説法をせられた。これがまた、我々の生活の規範になるのであります。

片寄れる生活より中道の生活へ

でありますから、それを遠きお釋迦様と見ずして、吾々の實際生活として見たい。お釋迦様の初めの太子の御時代は、「俺が〳〵」で滿足なすつた時代、それから、この「俺」と云ふものは身と心とあると云ふ所から、出家して今度は心の「俺」を求められた。而して、悟を開かれて「無我」――「俺」なんと云ふものは無いと云ふことがわかり、「俺」に執着するから迷ふ、「俺」に執着するから悲しいのだ、苦しいのだと云ふので、「無我」を説かれた。それなら、自分は無我ですまして居られたかと云ふと、若しさうだとすれば、五十年の説法は無いわけであるが、「三界我有一切衆生吾子」と云ふ立場に立たれた所に、もろ〳〵の説法があらはれ、「俺」と云ふものが大きくなつて來た。即ち小さい「我」を捨

てゝ大きな「我」に即くのでありますから、言葉を換へて言ふと、出家から悟を開かれる迄の釋尊は、自利の爲めに修行をせられましたが、悟を開かれましてからの五十年の説法は、利他の爲めであつたと考へていゝのでございます。

さて今度は、更に現在の吾々の生活を考へてみると、吾々には物質の生活と精神の生活がある。或は現實の生活と道德の生活がある。そのどちらかの生活をやつて居るのが吾々であります。お釋迦様の教は中道實相を説かれた。その中道の意味を日本で實現せられたお方はどなたかと云ふと、聖德太子であらせられます。聖德太子は日本の釋迦牟尼佛と言はれた方で、釋迦牟尼佛一代の教説を躬ら體驗せられました。唯個人のみの生活ではなくして、この信仰生活でありますが、それを現實の政治の上に、世渡りの上に、實現されたのが聖德太子であります。だから、聖德太子は坊さんではなくして俗人である。併し乍ら、坊さん以上の信仰を有つてゐらつしやつた。それで私はいま聖德太子がどう、お釋迦様がどうと、遠い所は申しませんが、お釋迦様が説かれ、聖德太子の示された教は何であるかと云ふと、中道の道理である。中道實相こそ大乘佛教の根本義であります。中道實相と云ふは、一語で言へば、片一方へ偏しないと云ふことです。これは何も、昔の佛教の道理と云ふより、近く國際聯盟脱退の御詔書にも、「嚮フ所正ヲ履ミ行フトコロ中ヲ執リ」と仰せられました。「中」と云ふは眞ン中であります。一方に片寄つてはならないのです。昔、德川家康がおかじの局と云ふ人に問はれた。「世の中で、一番不味いものは何だ」「鹽です」成程鹽ばかり食へば、これ程不味いものはない。「それなら、世の中で一番美味いものは何か」「それは鹽です」鹽氣が無かつたら、物は不味くて食へぬ。で、一番美味いものが一番不味いものであり、一番不味いものが一番美味いものでもある。つまり中道でそれを程よく使ふか使はぬかが、美味くもなり不味くもなる境目である。今日は右傾思想、左傾思想と云ふが、右傾

もいかぬ。左傾もいかぬ。片一方へ寄つては善とはならぬのであります。

そこで人は、眞ン中、即ち「中」を執らなければなりません。この中を執つて行くのには、小さい俺を捨てゝ無我になると云ふだけではいかぬ。無我を更に轉化さして大我になるのです。吾々は小さい俺に執着するから迷ふ。だからその小さな俺を打破つて大きな俺——大我になることが大切だ、と云ふことを先づ一つ言ふて置きまして、それから現實生活と道德生活、並に信仰生活と云ふものを見て行きたいと思ひます。

現實生活と欲望

一體、現實生活と云ふものは何であるか。つまり生活とは、生きて行くことなんで、現在生きて行くのには、食はねばならぬ。着ねばならぬ。住まねばならぬ。その食ふにつけ、着るにつけ、住むにつけては、何が要るかと云ふと金が要るのであります。そこで金が欲しい、これが現實生活なんで、誰でも金を欲しがる。金が仇の世の中で、どうか仇にめぐりあひたいと云ふやうなことを考へて居る。なぜさう考へるかと云ふに、生きると云ふことが、たゞ着て食つて住まつて居るだけならば、これは何んでもない。ぼろを着て殘飯を食つて軒の下に寢て居つても生きて居れる。さう云ふ生活は餘り感心ぢやないが、さう云ふ生活をして居る者もあるのです。

ところが、人間と云ふものは、たゞ生きてさへ居ればいゝと云ふのでなく、どうか人並に生きて居りたいと思ふ。この人並にはいろ〳〵あるので、どこからが人並かわからぬ。そこで、人並に生きて居りたいが、それでも、あの人より立派に生きて居りたいと云ふ所に、人間の限り無い慾望のあらはれがあるわけで、慾望は限りが無いのでありま

すから、これでも足らぬこれでも足らぬ。と「足らん〳〵」と云ふのが、現實の人間生活の一現象であります。足りて居る人もあるでせうが、大抵は「足らん〳〵」と言ふ。

物事の　一つ叶へばまた二つ　三つ四つ五つ　六かしの世や

人間と云ふものは、足らん〳〵と追廻されて居る生活、その生活が所謂第二十世紀と申しますか、一九〇〇年代と云ふか、現在になつてそれが非常にひどくなつて來たと云ふことを考へなくてはなりません。足らんからして、少しでも他よりも多く取らう、とやつて行くのを、これを生存競爭と云ふ。他よりもうまく行きたい、よく行きたいと云ふので、中には他を押倒してでも「俺が〳〵」でやつて行く、この生存競爭と云ふことがひどくなつて來ましたのはどう云ふ原因であるかと申しますと、昔と人間の生活狀態が變つて來たと云ふことが一つ。昔は、都會では成程、生存競爭があつた。けれども、農村などに於きましては、百姓さんは自分で作つたものを食つて、自分で手織の着物を着て居ると云ふ風で、生活が比較的樂でありました。が今日では、何んでも金で買はなければならぬやうになりましたから、農村の生活——田舍の生活も非常に苦しくなりました。殊にこの生活困難と云ふ現象の、著しくあらはれて來たのは、都市であります。この名古屋も六大都市中の有數な都市でありますが、現實生活を考へる上に、都市と云ふものを忘れてはなりません。何故かと云ふと、近年、どこの國でも都市と云ふものが非常に大きくなりました。この四十四、五年間に、イギリスのロンドンは人口が二倍しまして、今度大ロンドンと云ふのになると、人口が四倍になつた。フランスのパリーは人口八倍、ドイツのベルリンは二十四倍、隨分と殖えたものです。もつと殖えた所は、アメリカで、アメリカのニューヨークは五百十八倍、それが一番大きいかと云ふと、アメリカのシカゴは、これは工

場都市ですが、四十年ばかりの間に、七百八十倍になりました。そんな西洋のことはどうでもよいとして、日本はどうかと云ふと、東京は、これは明治九年の調べと昭和五年の調べとでは、人口二倍して居ります。ところが、今は大東京となつて、附近の郡部を合併しましたから、人口四倍して居ります。大阪はそれよりもう少し多い。もつと多い所は神戸の七倍で、名古屋も大體それ位であります。横濱が十倍、名古屋は先達、人口百萬と言ふてゐた折は、實際よく調べたら九十何萬しかなかつたが、それが今は僅かの間に百何萬と云ふ風に殖えた。日本全體から云ふと、明治二十二年に市が出來て居り、市の數が日本で三十九あつた。その人口は、全國人口の一割でありましたのが、それが日露戰爭後になると、市の數が六十に殖えまして、その人口は、日本全國人口の二割が市になつた。それが最近では市の數が百二十九あり、その人口は日本人口の四割八分、約半分が市の中に住んで居ると云ふ狀態であります。なぜこんなに市が殖え、市の人口が殖えるかと云ふと、これにはいろ〳〵な理由があるのでございます。

都會集中の世相

先づ、政治上の理由として、昔は、自分の住居を勝手に移轉することが出來なかつた。自分の治められて居る大名の領分から、向ふの大名の領分へ行つて住むと云ふことが、なか〳〵出來なかつたが、今日は憲法上、移轉住居の自由と云ふものが與へられまして、どこへでも行つて住めると云ふ風で、これが一つの原因でありますが、そんな事どころでない。農業が段々發達した爲めに、今日は農村に人口が剩つて居ります。これが都會へ集まるところの、また一つの原因となるので、その他經濟上の原因としましては、現代は產業が發達しまして、大工場が出來ます爲めに、

その工場だけで市になつて居る所があります。例へば福岡縣の八幡市、山口縣の宇部市のやうに、大工場がある爲めに市が出來て居る。その他交通機關の發達と云ふことも原因になつて、地方に小さい都市が段々出來たり、大都市へ〳〵と地方から人が集まつて來て、都會の人口が殖えると云ふ風で、マア政治とか經濟とか產業と云ふやうな方面は私の專門外でありますが、精神的原因としましては、都會に出て成功したいと云ふ考へから、都會を目ざして集まつて來る者が隨分多い。田舍に居りましては大成功もせんが、その代り大失敗もせんと云ふ風で、兎に角、大成功をするのには、一攫千金の利を獲るのには、都會に限ると考へて皆出て來る。都會へ出て大成功をする者よりも、失敗をする者の方が、どつちかと云ふと多いが、その失敗をする者は存外眼につかないのです。失敗したのは社會の下に隱れ、成功した者は上に出るので、そこで地方の農村などの人は、成功した人ばかり見て、自分もあのやうにならう、と成功を夢みて都會へ集まると云ふあんばいで、その他都會生活を憧れて、同じ住むなら、田舍よりも花やかな都會に住みたいと云ふので、都會へ集まつて來ます。都會から發行せられる新聞、若しくは、月々に出る雜誌の口繪などを見まして、農村の子女は、同じ住むならかう云ふ所に住みたいと思ふ。これを都市の誘惑と言ふ。それから更にもう一つは、都會へ見學に行きます。東京へ見學に行くとか、或は名古屋へ見學に行くとか、大阪へ見學に行くとか、さうして、見學して來る所は、東京なら東京、大阪なら大阪のいゝ所ばかり見て來て、惡い所は見學しない。ルンペンの住宅と云ふやうなものは見學せず、銀座通とか、淺草公園とか、心齋橋通とか、道頓堀とか、さう云ふ美しい賑やかな所ばかり見るから、「あゝ都會はいゝナ」と思ふ。その裏にどんな穢ない所があるか、哀れな所があるか知らないのであります。その裏を見たら恐らくゾッとするでありませう。がそれを見ない。

マアさう云ふやうな事が都市の誘惑となつて、都會へ集まつて來る。その結果、都會生活と云ふものは、どう云ふものであるかと云ふと、農村の生活は定着的と云ひまして、ちやんと一定の所に住んで、あつちこつちと動かない。だから、隣りに誰が住んで居るか、向へに誰が住んで居るかわかる。ところが、都會の生活は匿名的と申しまして、名が匿れて了つて居る。これが都會の一現象で、大きな都會になればなる程、誰が誰だかわからなくなる。田舍で學校の校長さんが、何か立喰ひでもして御覽なさい。お菓子の立喰ひでもしたら、直ぐに一村の問題になる。「あの校長は不品行でいかぬ。立喰ひをやつて居つた」などゝ言ひ出す。けれども、東京や名古屋と云ふやうな大都會では誰だかわからぬから、立喰ひをやつたとて滅多に問題になりますまい。夏目漱石の「坊つちやん」と云ふ小説がありますが、あの小説に書いてある、東京で育つた坊つちやんが、中學の先生になつて四國へ行つた。そして、汁粉を食ひに這入つたら學校の問題になつたと云ふので、先生だつて汁粉食へぬ道理はないと憤慨する。實に世間狹い話である。都會は全く匿名的で、近頃諸君は新聞で御承知の通り、有名な或華族のお嬢さんが家出をして女給になつて居た、それを誰も氣が付かなかつた。これが田舍であると直ぐ氣が付く。「あれはどこそこのお嬢さんだ」と言ふ。穢ない姿をしてゐても、「あれはどこのお嬢さんだ」立派な姿をしてゐても、「彼奴は貧乏人のクセに」と云ふあんばいです。ところが、都會では、立派な姿をして居れば、どこの人やらわからぬ。どんな華族のお嬢さんでも、穢ない姿をして居れば穢ないと見られるだけで、たゞ外見だけで人格がわからないのが都會生活である。匿名的だからわからない。誰が誰やらわからぬ。自動車の運轉手なども、こつちが立派な姿をしてゐると、「お嬢さん」と言ふ、穢ない姿をして居ると見向きもしない、と云ふやうなのが都會生活で、服裝で人を見分ける。都會はどうもさうなりやすい。小都會では、

まだ大分定着的の傾向がありませうが、東京邊でみますと、もつともひどい。隣りに住んで居る人を知らぬことが澤山あります。これは商業地區ではそんな事はありませんが、住宅地區へ參りますと、隣りに誰が住んで居るか知らぬことがある。よく見受ける方だナと思ふて居ると、それが隣りの人であつたりする。さうかと思ふと、また引越が非常に速い。この間引越して來たかと思ふと、もう引越して行くと云ふ風で、これを浮動性と云ふ。動いて居つて誰が誰かわからぬから隨つて無責任になる。で、都會生活者は動いて居つて、利益を非常に爭ひ、匿名的で無責任である結果、どう云ふ事が起るかと云ふと、生存競爭がひどくなつて、他を押倒してでも成功しようと云ふやうな者が多くなり、人間の氣が險惡になつて來ます。それで「人を見れば泥棒と思へ」などゝ言ふやうになる。田舍では、さう云ふことを餘り言ひません。どこそこの誰と云ふことがわかつて居るから、そんなことを言ひませんが、都會ではわからぬから、さうなつて來るのです。我利々々主義で、皆「俺が〳〵」で行かなければ生きて居れぬ、と云ふやうなのが都會人の缺陷でありませう。

現實生活の見本

一體、日本人と云ふものは、自分の知つて居る人には親切な國民であるが、知らぬ人にはちつとも親切でない。汽車などに乘つて混み合つて居る時、自分の知つて居る人でも乘込むと、「マアお掛けなさい」と、荷物を除けて掛けさせると云ふ風で、實に親切であるが、知らぬ人が來て御覽なさい。荷物を置いて知らぬ顏をして居るやうな人が隨分多い。知つた人には親切であるが、知らぬ人には極めて不親切です。我利々々主義で、さうして、强い奴は勝つて行

くが、弱い奴は敗ける。敗けた結果、都會生活は極端と極端の對立する生活である。田舍でも金持と貧乏とある。だが、都會程ひどいことはない。東京なら東京には、何億萬圓、何千萬圓と云ふ金持が居るかと思ふと、片一方には文無しが居ると云ふ狀態で實にひどい。田舍では貧富の懸隔がそれ程ひどくない。違つたところが十萬圓位で、それでもたいへんだが、都會に比しては隔りが少ない。教育から言ふても、都會には教育のある人が多い。その代り馬鹿も多い。自分の姓名を知らぬ人など澤山居るのです。私共が關係して居る、東京の上宮教會の慈善病院などでも、受付で患者の名を呼ぶ時に、女の人なら「加藤さん」「福島さん」と、姓を呼んでも知らぬ顏をして居るが、「お花さん」と名前を呼ぶと、「ハイ」と言ふ。自分の姓を知らぬのです。これは冗談だとお思ひになるか知れんが、地方の都會にもさう云ふ傾向があるかわからぬ。小學校へも行かぬやうな人があり、大學の先生もある。かう云ふ風に、財產でも教育でも、すべての事が極端と極端が相對して居るのが都會です。都會には教育機關など完備して居りますが、非教育機關もまた完備して居る。カフエー、バー、料理屋、藝者屋、遊廓など、ちやんと完備して居ります。さう云ふ工合になつて居り、さうして、人の外見だけを見て人格を見ないから、都會生活は兎角贅澤になる。俺は彼奴等と違ふと云ふことを、どこで示すかと云ふと着物で示す。上の人がいゝ着物を着ると、下の人がちやんとその眞似をし、それがズツと流行つて行く。皆が着るやうになると面白くないから、上の人が變つたものを着ると、下の者がまた眞似て着ると云ふ風で、流行が變つて行く。かう云ふやうなのが都會生活の狀態なんで、皆「俺が〳〵」でやつて居ります。

その結果が、最も著しくあらはれて居るのが火事です。都會の火事は兎角大きくなる。それは、家が列んで居るから大きくなると云ふことも一つですが、借屋が多いから、「火事だッ」と云ふ時に、家は燒けても、自分の家でないか

ら損ぢやないが、品物が燒けたら、それは自分の物だから損になる。そこで、火を消すことよりも品物を出すことばかり考へる。實際です。それが東京邊りの火事が大きくなる原因の一つであると云はれます。現代の都會は、現代人の思想を代表する。そのもとをただすと「俺が〳〵」と「足らん〳〵」でやつて居るのであります。

昔の『雲萍雜志』と云ふ本に、紀國屋亦右衞門と云ふ人の話が書いてある。あの人は大阪の或金持の家に奉公してゐた。正直に働いたので、主人が亦右衞門に向つて、

「お前に、百兩の資本を貸してやるから、それを千兩にせい。千兩にする迄、俺の家に來ないやうに」と言はれる。そこで亦右衞門は考へた。百兩を千兩にする方法、これは薄利でも人が毎日使ふ物を賣るに限る、紙を漉いたらよからうと云ふので、紙屑で塵紙を漉いて賣つた。それが西の洞院紙の初めです。亦右衞門が京都の西の洞院で所帶を持つて漉いたから、斯く名づけられて居ります。東京では淺草紙と申しますが、あの汚ない塵紙を漉くことによつて、三年目に三百圓、五年目に千兩になつた。そこで千兩の金を持つて主人の所へ行くと、

「えらい、感心だ。お前は見どころがあると思つた。この千兩を渡すから、お前ひとつ今度は一萬兩にしてみい」

「よろしうございます」と云ふので、今度は三年目に一萬兩にした。さうすると、

「お前は矢張り偉い。この一萬兩を改めてお前にやるから、こいつを十萬兩にしてみい」

「ヘイ、よろしいございます。千兩から一萬兩にするより、一萬兩の元手を以て十萬兩にするのは、割に樂ですからやります」

今度は三年目位に十萬兩にした。

「お前は實に偉い。この十萬兩を渡すから、ひとつ百萬兩にして呉れないか」

主人がかう言ふと、亦右衞門が言ふのに、

「それは、一萬兩を十萬兩にするより、十萬兩の元手で百萬兩にする方が樂であります。だが、さうやつて金を追ツかけて居つては、私は生涯、金に使はれて暮さなければなりません。もうあなたは一體、どの位財産がおありなさいますか」

「いや、幾らあるかわからぬ」

「足らぬのですか」

「足らぬことはないが、あつても〳〵欲しいのは金だ」

「あつても〳〵欲しいのは金だ、と金を追ツかけて居つては、生涯、金の爲めに追ひ使はるゝ丈ではありませんか。そんなことで、人間としての生甲斐はどこにあります。こんな事をしてゐては、人間としての生甲斐はありません。私は僅かな金で生活が出來ますから……」

と、その金を主人に返して出家をし、圓智坊と名乘つて信仰生活を樂しんだ——と云ふのでございます。

おちて行く　ならくの底をのぞきみん　いかほど欲のふかき穴ぞと

これは彼の辭世です。

人間は或程度迄は金があるがいゝが、金は人間の使ふもので、金に使はるゝものではない。金に使はるゝやうな境界では、人間としてつまらぬ。今日の人はおちて行く奈落の底を覗いて、「足らん〳〵」とやつて居る。それが現實生

活です。現實生活は自利を目的として居る。これでも足らんこれでも足らん、と日も足らず自ら利することによつて道德生活を忘るゝのが現實の狀態であります。

道德生活と經濟生活

然らば、道德生活とは何であるかと云ふと、いまのは他を押退けても、自分が利益を獲ようとする自利の生活、道德生活は利他の生活です。吾々は一人では生きて居らぬ、他と共に生きて居ると云ふことを、根本に考へて行くのが道德生活です。人間はオギヤーと生れるや親子となり、親によつて養ひ育てられ、長じては世の中に出でゝ多くの人と、お互に持ちつ持たれつ共同生活をして居るので、衣食住はすべて多くの人の力の集まりである。決して自分一人で生きて居るのでないから、他を思ひやつて行くと云ふことが、道德生活の根本である。されば孔子は、「吾が道一以て之れを貫けり」人の道は一つで貫くのだと言はれた。一とは何かと問はれて、「忠恕のみ」と答へて居られる。忠恕とは思ひやりである。お釋迦樣は何んと言はれたかと云ふと、「佛心者大慈悲是也」と仰せられた。大慈悲とは思ひやりである。他を愛することであります。キリストは何んと言ふたかと云ふと、「愛」と言ふた。どこの國の道德でも、他を思ひやる、他を愛して行くと云ふことが根本である。だが現實の生活はさうではないのであります。

現實の生活はどうかと云ふと、自利主義で、我見——「俺が〳〵」であります。ところが、道德生活は「無我」であります。自分よりも他を利する。殊に菩薩の生活は、自ら度らずとも他を度してやらう、自ら利せずとも他を利させてやらうと云ふので、この他を利すると云ふことによつて、持ちつ持たれつ生活の調子がととなうて、そこに愉快な生

活が生れるのである。今日の生活は他と一緒に生きて居る生活です。昔の生活は他との關係が今日程ではなかつた。例へば行燈を一つ點すのでも、自分が行燈を出して來て、火打石で火を打つて點してゐたが、明治になるとランプになつた。ランプも自分で掃除をし油を注いで自分で火を點すが、今日では電燈になつたので、自分が電燈を拵へて、自分が點けると云ふわけにいかないと云ふ風で、多くの人と持ちつ持たれつして生活する、公共的な生活をすると云ふのが現代の生活の姿であります。昔は井戸の水を汲んで飯を焚いてゐたが、今は水道の水を使ふやうになつた。水道は自分一人で引くわけにいかない。皆それは市なり公共團體でやつて居る。電燈にしても水道にしてもさうで、その他交通機關などでも、今日は電車があり汽車があり、いろ〳〵の交通機關があるが、昔は自分で歩行するか駕籠位のものであつた、併し、電車や汽車を自分で拵へて自分で運轉するわけにいかぬので、他の力によらなければならない。今日は、かう云ふ風に公共生活になつた以上は、自分さへよければ、他はどうでもよいと云ふのでは、公共生活は成立しません。そこに、公共生活を全からしむるには、利他心と云ふものゝ上に立脚して、道徳生活を營むと云ふことが大切なんであります。すると、茲に問題が起るのであります。

成程、道徳生活と云ふものは、利他を本とするのであるが、他の利益ばかり考へてゐては、自分の利益が成立たんでないか、とよく言ふ。自利と利他とは相反する、自分が利益を獲ようとしたら、他人の利益を押退けなくてはならぬ、他人に利益を與へるなら自分の利益が無くなる、と言ふ人がある。そこで、自分の利益を考へると共に、他人の利益も考へて行かなくてはならぬが、この利益を考へるのを經濟生活と云ふ。それから善惡を考へるのが道徳生活で道徳の目的は善であり、經濟の目的は利益である。そこで、道徳をすれは利益が獲られぬ、利益を獲ようとすれば道

徳に反かねばらぬ、と昔からさう云ふことを言ふて居ります。これは抑々間違ふて居る。間違ふて居るが、昔の人はさう考へて來たのであります。

昔、眼科醫であつて、また非常な金持である土生玄碩と云ふ人に、大槻磐溪が、

「あなたは、非常なお金持におなりになりましたが、金を儲けるのに何か秘訣がありますか」と尋ねた。

「あります」

「どうか、それを教へて下さい」

「教へてあげたいが、一子相傳であるから、なか〳〵只では教へられない。けれども、マア心安い仲だから教へてあげよう。その秘訣と云ふは、仁義道徳を說くこと勿れ——これです」

仁義道徳を說いては、金儲けは出來ぬと云ふのでございます。

また或人は、「金儲けには三かくの法がある、即ち義理をかく、人情をかく、序でに恥をかくのだ」と言ふた。それでなくては金が儲からぬと云ふのです。或は佐久間象山先生は、「金儲けの秘訣は、畜生の心になるんだ」と言ふたと云ふので、果して金儲けと道徳とは相反して居るやうでございますが、これは考へものです。どうも宗教の話や道徳の話もいゝが、あれでは迚も儲からぬとか、あんな事を言ふて居るから、あの人はうだつがあがらぬ、などゝ申しますが、實際、うだつがあがらぬやうな宗教は本當の宗教か、また、宗教に背いて金儲けたのが本當の金儲かどうか、これをひとつ考へてみなければなりません。

道徳と利益の一致

金儲には二つあります。大きな利益と小さな利益とある。道徳にもまた二つある。小さな道徳と大きな道徳とあるところが、小さな道徳と大きな利益とは衝突する。小さな利益は大きな道徳と衝突する。大きな道徳は大きな利益と一致し、大きな利益は大きな道徳と一致する。言葉を換へて言ふと、小善は大利と相反き、小利は大善と相反き、大善は大利と相一致し、大利は大善と相一致する。面倒臭いことを言ふやうですが、小さい善い事をして、利益にならぬことがある。例へば巡査が泥棒を捕まへて來たのを、氣の毒だと云ふので、折角捕まへたその泥棒を助けて逃がしてやつたとする。成程、泥棒を助けたと云ふことは、助けたと云ふことだけ考へたら、それはいゝことだが、それは泥棒一人の爲めにいゝことで、社會はその爲めに、泥棒の害を受けなくてはならない。故に、泥棒を助けると云ふ小さな善は、社會の大きな利益と相反する。また、小さな利益を圖らうとすると、大きな道徳に相反する。小さな利益を圖らうとするなら、一番に手ッ取り早く儲かるのは、悪い品物を高く賣れば儲かる。だが、これは小さい利益である。悪い品物を高く賣つて儲けるのは、小さい利益でございます。一度は瞞されて買ふだらうが、二度目からは買ひに來ない。品が悪くて高い所へ誰が態々買ひに來ますか。品がよくて安くして置けば、眼の前の利益は少ないやうだが、あそこの物は安い、品がよいと云ふので、段々賣れて行くことになつていつ迄も儲かる。だから、利益には永久の利益と一時の利益がある。「不義にして而して富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し」で、不義の富貴は浮べる雲の如きものである。悪い事をして儲けるのは不義の利益であるから、一時は儲かるが、そいつは雲のやうに消えて了ふ

眞の利益は眼前では小さくても、積り積つて大きな利益が得らるゝことになる。或人が或商人に向つて、「一體、商人などは屏風のやうなものだ。曲らなくては立たない」と言ふた。すると、その商人が答へて言ふのに、「成程、商人は曲らな立ちません。商人が十圓に仕入れた品物を十圓で賣り、一圓で仕入れた品物を一圓で賣つては、商人は立つて行けない。それでは手間損ですから、一割なり、五分なり、三分なりの利益を得て行くのが商人です。だから、少しは曲らなくてはなりません。餘り曲つたら、屏風は倒れて了ひます。もつと大切なることは、下が眞ッ直ぐでなくては屏風は立ちません」これは面白いことを言ふた。商人が一割なり五分の利益を得るのは當り前であるが、下が曲つて居つては屏風が立たぬやうに、商人も下に正直と云ふ敷物がなくては、永久の利益は得られないと云ふので、つまり道徳の基礎の上に立つて商賣をしなくては、永遠の利益は得られないと云ふのですから、その教訓は餘程面白いと思ふ。たゞ曲らなくてはいかぬとばかり言ふが、下を眞ッ直ぐにしなくては屏風は立たぬ。道徳の基礎根柢無くしては、立つて行くものではない。

『心學道話』の開祖石田梅巖は、かう云ふことを言ふた。「本當の利益を得るには、思ひやりの心がなければならぬ。と云ふのは、商人は一文の金も惜む。自分が金が惜しいやうに、天下萬人誰でも金が惜しい。その惜しい金を出して買ふのだから、先方の人が、あゝこれでよかつた、と喜ぶやうな賣方をしなければならぬ。それでなくては、天下の金を貪るものである」と、また二宮尊德翁は、「賣手喜び買手喜ぶやうにせい」と言はれた。「賣手喜び買手悲しむ」と云ふのではいけません。さうかと云つて、餘り値切倒して、「買手喜び賣手悲しむ」でもいかぬ。お互に喜び合ふと云ふ道德生活でなければ、眞の利益は得られぬ。一時の利益は不道德でも得らるゝが、永久の利益を得るにはどうして

も、道徳を基礎に置かなくてはなりません。

されは、自利と云ひ利他と云ひ、前に言ふた現實生活は自利、道徳生活は利他でありますが、この自利と利他とは二つのものではない。道元禪師のお言葉にもありますやうに、愚人は利他を先とすれば自利を失ふやうに思ふが、決してさうではないので、利他はやがて自利となるのである。我が金を惜しむ心を他に及ぼし、我が子を思ふ心を他人の子に及ぼす、その時、自分は大きな我になるので、それが即ち自利となるのである。吾々は兎角、小さな我に囚はれて居るから、「俺が〳〵」ばかりになり、他を押退けても自分の利を得んとする。それでは眼前の小利は得られても永久の大利は得られない。で、人間の價値と云ふものは、他を思ふ心の多少で定まるのであります。小さな我に囚はれて居る人間は、俺さへよければ他はどうでもよいと思ふ。もつとひどいのは、俺の體より俺の口の方が大切だ。口さへよければ體はどうでもいゝ、少しは毒でも食ひたいと云ふのがある。「お前、そんなに酒を飲んでは毒だ」「毒でも飲みたい」と云ふやうなのは、體より口だけ可愛いのである。これは一番小さいが、その次には俺の體、そいつがもう少し大きくなると、我が體を思ふやうに、親を思ひ兄弟を思ひ、妻子を思ひ、我が家を思ふ。私は三杯の飯を一杯にしても親に捧げよう、兄弟に、妻子に食はせやうと云ふことになると、俺が大分大きくなるが、俺の家さへよければ、俺の家族さへよければ、他の家はどうでもいゝ、と云ふのではまだ小さい。我が家を思ふやうに、向へ三軒兩隣りを思ふやうになると、餘程俺が大きくなる。向へ三軒兩隣りを思ふやうに、一町一村を思ふやうになると、一町一村を思ふが如く一縣下を思ふやうになると、一縣下を思ふが如く一國を思ふやうになると、益々俺が大きくなる。世界人類を思やうになると、それは聖者と云ふことになるから、非常に大きいものになる。ところが、吾々は、國は

どうでもよい、村はどうでもよい、町はどうでもよい、俺さへよければ——かうなり易い。これは自利主義でございます。併し乍ら、俺さへよければ村はどうでもいゝ、町はどうでもいゝ、國はどうでもいゝ、と考へたら、國なら國が悪くなつたら俺も悪くなる。それでどうしても、さう云ふ考へは駄目です。自利利他でなくてはいかぬ。自分は何んぼよくても、近所が悪くなれば自分も悪くなる。例へば、町内で衛生掃除をするとか、豫防注射をすると云ふやうな時に、「俺の體は俺の勝手だ、俺は大丈夫だから要らぬお世話だ、」などゝ言ふて、衛生掃除も、豫防注射も自分の家だけせずに居つたら、自分は丈夫でも、向へがペスト、隣りがコレラ、裏が腸チブス、こんな風なら自分の家からも出ざるを得ぬ。それで自分の家から出さぬやうにと思へば、町内と一緒に、向へ三軒兩隣りと共に、衛生掃除もし豫防注射もすると云ふのでなくてはなりません。消防の問題だつて矢張りさうで、消防の設備をすると云ふやうな時に、俺の所だけ火事を出さなかつたらいゝ、消防の設備などに贊成は出來ない、と言ふても、向へから火が出た、隣りから燒けて來たとなつたら、消防の設備が無ければ、自分の家も燒ける。だから、どうしても他と一緒にやると云ふ考へを有たなければ、現代の生活は出來るものではない。

今日の國家は立憲政治なんだから、立憲政治は多數決で決まる。多數決で決まると云ふことは、一票の差で事が決まると云ふことである。そして、その一票の差で代議士の當落が決まる。然らば、我が一票は直ちに國家に關係すると思はなくてはなりません。一票位どうでもいゝと云ふことになりますと、どうでもいゝ人が出て、どうでもいゝ政治をするやうになる。茲に吾々は、大衆と共に生きて居ると云ふことを考へなくてはなりません。さうでないと自分も不利益になる。自分を利する積りでやることが、自分の不利益になります。

これは話が細かくなりますが、電燈などにしましても、一ケ月幾らと云ふ風に、所謂定額で拂つて居る電燈は、必要でない時も點けッ放しで居ります。それは點けて居つても居らなくても、同じ料金を取られるからですが、メートルで點けて居ると、なか〳〵やかましく言つて、なるべく不必要の時は消して置くやうにします。女中などに、「お前そんなことをするから、先月は電燈料が高かつた」と小言を言つたりする。十燭幾ら、十六燭幾らと定まつて居ると要らぬ時でも點けて置く方が得のやうに思ふが、併し、要らぬ時に點けて置けば電力が無駄になる、電力が無駄になれば、それが多ければ多い程、電燈料が高くならざるを得ぬ。ところが、儉約して電力が剩れば、電燈料が安くなるわけで、これは話が遠廻りになりますが、さう云ふ風に世の中は、持ちつ持たれつ相互關係して居ります。だから吾々は、自分の一擧手一投足は直ちに自他に關係すると云ふことを忘れてはなりません。

信仰生活の味

前に申しましたやうに、兎角、人間と云ふものは、眼の前の小さな「俺」に囚はれますが、この小さい「俺」程、動き易い俺はないのである。人にちよつとかうだと言はれると、「成程」と、こつちへ動く。さうでないあゝだと言はれると、また「さうか」と、あつちへ動く。こつちへ行つたり、あつちへ行つたり、吾々の心は動き通しであります。その動く證據は、都會の流行の變るのを見てもわかります。流行ると言ふと體裁がよろしいが、あれは眞似をするのです。あの人がかういふ帽子を冠つて居るとなると、俺もく〳〵と云ふ風で、さう云ふ風に人間は眞似をする動物だ。そこで吾々は、自分と云ふものに目覺めて、他人は笑つても、他人は謗つても、笑はゞ笑へ謗らば謗れ、他は他、俺

は俺と、他と共にあることを理解すると共に、人を相手にせず人以上のものを相手にする、と云ふ信仰生活が無かつたら、どうしても我見我慢に囚はれざるを得ません。人と人以上のものを結合するのを信仰と云ふ。佛教の信仰は、佛陀と衆生との感應道交である。佛を我の外に見ず、我の心の奥に佛在しますと考へて行くのです。佛の光は我が心の奥迄も射拔き給ふ。寤ても寐めても吾々は佛と共にあるのである。ひとは知らない折があつても、ひとは氣の付かぬことがあつても、佛はいつまでもみそなはして在す。いま自分の行なつた道德は、假令、茲にその果報があらはれなくとも、永遠の我が魂の上にあらはれる。眼の前にあらはれなくとも、大いなる社會と云ふ我に、大いなる宇宙と云ふ我に、それは影響して行くものである。原因があつたら、屹度結果がある。茲に結果があれば、必ず原因があるのである。たゞ吾々はその原因を知らぬから、「偶然こんな事が起つた」などゝ言ふ。また「今日は日曜で、天氣だと思つたら、運が惡くて雨が降つた」と云ふあんばいに、何んでも「運」に歸する傾きがある。雨は運で降るのではない。雨が降るのには雨が降る原因がある。臺灣海峽に何ミリの低氣壓があつて、今日の何時頃にはそれがやつて來るから雨が降ると云ふ、その原因結果の理法を、天文臺の先生はちやんと知つて居るが、吾々はそれを知らぬから、「運が惡くて……」と云ふ。「運が惡くて、こんな貧乏人に生れた」とか「こんな不仕合せに遭ふて、運が惡かつた」とか、或は「運がよくて儲かつた」などゝ言ふが、これは運ではない。貧乏するもの、不仕合せに遭ふのも、儲かるのも損をするのも皆、それ〴〵の原因が存するのであります。原因があつても、我が智淺くしてこれを知らぬから、たゞ運だと言ふ。吾々の知らぬことは運で片づける。「運が惡くて風邪をひいた」と、風邪迄運にする。醫者に聞いてみると、風邪をひく原因がちやんとある。吾々は見る所淺くして、偶然である、運であると言ふて居るが、三世十方を

照見し給ふ佛の眼から見れば、茲に果報あれば必ず原因があるに違ひない。

然らば、その果報が眼の前にあらはれずとも、正しき道を行ひ、大いなる我の爲めに盡して行けば、その果報は必ず將來に、未來にあらはれると云ふ、この確信の上に於て、はじめて吾々は、大きなる我の上に立脚して生活して行ける、そこに無我の生活があるので、信仰生活、宗教生活がそこに行はれて行くわけでございます。風のまに〳〵飛び行く一枚の紙片でも、大きな石に貼付くれば動くものではない、西に東にと飛び行く吾々の心を、信仰と云ふ糊を付けて、三世十方に亘る佛と云ふ大磐石に貼付ける時、茲に不動の信念が確立し、金剛不壞の信仰生活が生れて來るのであります。と云ふて、信仰生活と云ふものは、世の中を離れて了ふものではない。小乘教徒は離れます。「世を捨てゝ山に入る人、山もまた、浮世なりせば、いづち行くらむ」で、世を捨てゝ山へ入つても、山も矢張り浮世であるこの世を捨てるのが小乘佛教でありまして、大乘佛教はさうではありません。即ち佛教が日本に傳はりまして、聖德太子が大乘佛教の道をハツキリして下さいました。大乘佛教は、正しき道と正しき利益とは二つでない、眞道と實利が一致して行くと云ふのが、これが太子の大乘佛教であります。然るに、今の人は、信仰と世渡りとは全く別なものだと考へて居る。お釋迦樣はその事を說かれまして、『百喩經』の中に、かう云ふ風な例話が示されて居ります。

これはお聞きになつた話でございませうが、或所に、非常に薯の好きな夫婦がありまして――それはどこにでもありますが――いつも薯を食つて喜んでゐた。ところが、その主人が或時、友達の所へ招かれて行つた。さうして、その友達の所で薯を出されたので、それを食つたところ、家で食ふ薯よりも非常に美味い。「どこの薯か」と聞くと「どこそこの薯だ」と言ふ。「俺の家もそこの薯だが、お前の家の薯は、どうしてそんなに美味いのか、どうして食ふん

だ」「燒いたり蒸したりして食ふ」「俺の所もさうして食つて居る」「それはお前の所は、燒いた薯を薯なり食ふだらう、蒸した薯を薯なり食ふだらう、だから不味い。俺の家では、薯に鹽をちよつと付けて食べる。それでこの味が出るよ」「成程、鹽と云ふものは、そんなに味が出るのか」と云ふので、その親爺は喜んで家へ歸りまして、細君に言ふ。「今日は、どこそこで非常に美味い薯をよばれた。どうして美味いかと聞くと、鹽を使ふ。これは薯に付けて食つても、あの位美味いから、鹽だけ食つたら、餘程美味いだらう」と、さう言ふて鹽をなめたと云ふ話を、お釋迦樣が例にとつて、いろ〳〵と說かれました。これは何んであるかと云ふと、今の道德を行ふものや、宗教を言ふものは、鹽ばかりなめて、道德は、宗教は、むつかしいとか、からいとか、苦いとかやつて居る、世間の利益を求るものは、薯だけ食つて居るのだから、日常生活に味が無い、日常生活に味があるやうにするのには、宗教の鹽が這入らなくてはならぬ、と云ふやうな意味にとれるのでございます。

鹽ばかり食つたんでは、これは美味くも何んともない。茲が眞道と實利の一致する所以、眞俗二諦の教理が茲にあるのであります。片一方だけではいきません。今の宗教家は鹽ばかりなめて、お寺で苦い顏をして居るのではないでせうか。今の現實の生活者は、薯だけ食つて何んだか物足らなさを感じて居るのではあるまいか。「今日もまた起きて働かなくてはならぬが、あゝ厭やだなア」これが多くの現實の生活者の心持でせう。厭やだと思ふても、矢張り働かなくてはならぬ以上、同じ働くなら、「あゝ有難いことだ、今日もまた達者で働くことが出來る。世の中には病氣で働くことの出來ぬ人もある。職業が無くして　くことの出來ぬ人もある。それを思ふと俺は、親の恩澤によつて生れ育てられ、斯くも丈夫に毎日々々働いて、生活をして行くことが出來る」と、さう云ふ心になつて御覽なさい。日常の

生活に面白味があり、愉快に働けるではありませんか。「あゝ有難や、今日も働ける」と思ふのが信仰生活です。

三つの教

日本佛教に於て、聖徳太子が吾々俗人に説かれました三つの教があります。それは、

功徳心
報恩心
貧救心

この三つであります。功徳心とは何かと云ふと。勿體ないと云ふことです。今の人に最も缺けて居ることは、勿體ないと云ふことであります。勿體ないと云ふ心が無いから、物事を粗末にします。吾々の現在の生活と云ふものは、赫々たる太陽の光、滾々たる水の流れ、動物の吐く息、植物の吐く息、天地萬物相倚り相扶けて人間の生命を維持して行くのであるから、この天地萬物の功徳に對して、勿體ない、一物と雖も粗末にしてはならぬ、無駄にしてはならぬと云ふ心が必要である。今日の人には、この心が缺けて居るから、お母さんに下駄を揃へさしても勿體ないと思はぬ。揃へ方が悪いと言ふて、却つて腹を立てると云ふ風で、それではいきません。親にこんな事をさせて勿體ない、或は知らぬ人にかう云ふ事をさせては勿體ない、この物を粗末に使つては勿體ない、かう云ふやうな心持を忘れてはならぬのであります。

次は、感謝です。即ち報恩心でございます。有難いと思ふ心である。今の人は餘り有難がらぬ。「これは俺の權利

だ」と言ふ。前に申しましたやうに、商賣なら商賣の取引に於て、「賣手喜び買手喜ぶ」と言ふ風に、賣つた人もお蔭で金が儲かりまして有難い、買つた人もお蔭で品物が得られまして有難い、とお互に感謝し合ふ心持がなくてはならぬのであります。

それから、吾々が現在かうやつて生活して居るのは、直接間接に多くの人に世話になつて居ると云ふ報恩心、有難いと云ふ感謝、この感謝の心を以て多くの人を見ると共に、世には食ふに道無く、着るに物なく、住むに家無くして苦しんで居る多くの人がある、あゝ氣の毒な事だと思ふ心、これを貧救心と云ふ。

大乘佛教の極地

勿體ない、有難い、氣の毒だ——この三つの心は、日本精神の一つの流れとなつて、昔から吾々の血管に流れて來た。それだのに今日は、餘りに現實に因はれて、他を押退けて、自分だけ行かうと云ふ風で、勿體ないとか、有難いとか、氣の毒だと云ふやうな感じが、今の人には鈍くなつて來たやうに思はれる。それだから、電車に乘つてみても俺さへよければ他はどうでもよい、かう云ふ樣子がハツキリ見える。生存競爭ばかり激しくなつて、優勝劣敗と云ふのでは、それでは世の中は相爭ふより他ない。互に讓り合つて行くと云ふ氣持、思ひやりの心がなければならぬが、今日の世の中は、思ひやつて居つては電車にもなか〳〵乘れぬと云ふ風でせう。殊にラツシュ・アワーの混み合つて居る電車など、「マア〳〵、あなた……」などゝ言ふて居つたら、そのうちに電車は出て了ふ。そこで、これは自分だけが、かう云ふ事をしたのではいきません。多くの人々が共に俱に道德を守つて自然に、皆が一緒によくなるやう

に、と云ふ心持で進んで行くのが大切です。所謂、

「願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道」

で、己一人でなく一切衆生と諸共によくなると云ふ所に、茲に大乘教の極意があるのでございます。

聖德太子の御事に就きましては、八月參りました折に申上げましたから、餘り今日は申上げませんが、太子樣はいろ〳〵な點に於て、非常にお偉い方であると存じます。その中でも、かう云ふ事をひとつ思ひ出しました。この頃日本の品物が、ドン〳〵と西洋へ賣れますが、それは大體、明治になつて西洋から傳はつたもので、今は日本で拵へてこちらから逆に向ふへ賣れて行く。マッチ、洋服地なども、日本の製品が世界市場へひろまつて居ります。或はラヂオの器械の如きも、ドイツに迄賣れると云ふ風で、五、六十年前に、西洋から日本に傳はつたものを、今では日本で製造して、メード・イン・ジャパンの標の入つた品物が、世界の市場を征服しつゝあると言はれますが、それと並んで考へられますことは、今より千三百年前、欽明天皇の二十九年に佛教が日本に渡來して、聖德太子迄五十年しか經つて居りませんが、その五十年經つか經たぬうちに、聖德太子はお經の御講釋を遊ばされました。その聖德太子のお經の御講釋は、日本へ佛教を傳へて來た支那へ行きまして、支那の學者がそれを見て、これ程立派な講釋はない、と言ふて感心して居ります。これは實にお偉い。聖德太子は、そんな事は何もおつしやらぬ。太子樣は推古女帝の御前に於て、『勝鬘經』の御講釋を遊ばして、その御講釋を太子御躬ら筆を執つてお書きになりましたが、それが支那に傳はつて、支那の學者がそれを見て、これ迄も『勝鬘經』の講釋はあるが、こんな立派な講釋はないと云ふので、天台の有名なる荆溪の湛然と云ふ人のお弟子の明空が更に、聖德太子のお書きになりました御經釋に註を附けて、『勝鬘

經私鈔』と稱して、支那で行はれて居ります。で、天台の慈覺大師は日本に居らるゝ時、聖德太子の『勝鬘經義疏』をお讀みになつて居りましたが、慈覺大師が支那へ行かれますと、かう云ふ日本に大學者が居るのに、お前等は態々こゝ迄來なくてもいゝではないか、と言ふて見せられたのが、聖德太子のお書きになつた『勝鬘經義疏』である、と傳へられて居ります。

現實生活と信仰生活の一致

佛教傳來して僅かに五十年しか經たないのに、斯の如くである。西洋の文明が來て五、六十年、今や西洋文化を征服しましたが、今から千三百年前に、東洋文化――佛教が日本へ來ましても、聖德太子のやうなお偉い方があつて、これを日本のものにして教へられました。さうして、その聖德太子の教へられました佛教はと云ふと、八家九宗に亘つて和國の教主と仰がれ給ふその太子の佛教は、現實生活を離れたる佛教ではなく、現實生活と信仰生活とが一致した佛教である。自利利他圓融、小我を去つて大我に沒入し、現實生活の上に、花咲き鳥歌ふ淨しき世界を築きなすことが、太子の御理想であらせなれたと云ふことを考へまするにつけ、お釋迦樣の御一代が、花を以て終始遊ばされたと云ふことを思ひますにつけ、時は今陽春四月、野に山に美はしき花咲く如く、吾々の心の中の花を開かしめなければならぬ。心の花とは何ぞや、我見によりて結ばれた蕾を破つて、無我の美はしき花を開かせるのである。その花開く時これ即ち慈悲のあらはれであり、佛心の顯現となるのでございます。（信道會館講演）

372
493

昭和十二年四月十五日印刷
昭和十二年四月二十日發行

發行人　岐阜市朝日町三番地　大倉保

印刷所　名古屋市中區千早町五丁目　株式會社一誠社

發行所　岐阜市朝日町三番地　岐阜大乘會

終